

# 資料館だより

発行

高松宮記念ハンセン病資料館  
〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13  
電話 0423-96-2909  
FAX 0423-96-2981  
郵便振込 東京00130-7-764159  
高松宮記念ハンセン病資料館運営協力会

**開館五周年を節目に  
歴史の重みを問うものに**  
高松宮記念ハンセン病資料館館長 大合藤郎



明けましておめでとうございませう。

当資料館は一九九〇年に戦前、戦中、戦後における貞明皇后様、高松宮様のご仁茲を追慕するとともに、ハンセン病患者さんが経てこられた筆舌に尽くしがたい苦難の歴史資料を収集展示して、一般社会に問うことを目標として建設の募金活動を開始し、一九九三年について完成オープンしました。その後、一九九六年には資料館建設運営の陰の第一の目標でもありました念願のらい予防法廃止が実現いたしました。  
今年五周年を迎えるのに

あたつて、決定的な資金不足、人出不足の中で、私たちがおおよそ、その所期の目標以上のものを達成して

きたと勝手な自己評価をいたしてはおりますが、これは偏に運営委員をはじめ、さまざまな場面での中核をなす療友たちの奉仕献身によるものです。一々お名前をあげませんが心からお礼を申し上げます。  
さてこの資料の収集、展示、その他運営について、

日本のハンセン病の歴史百年のミュージアムとして、果してふさわしいものであるかどうか、この五周年を節目として、もう一度根本に立ちかえつて再検討いたさねばならぬと考えております。

資料館をして単なる考古的趣味的収蔵庫と化さしむるのでなく、社会正義へのメッセージの発信基地であつてほしいというのは、資料館企画当初からの念願であります。国内のみでなくアイデアなど国際的にも注目を浴びつつある今日、消すことのできない歴史の厳しき、重みそのものを問う資料館として改めて再検討し、再出発すべきと考えております。

どうぞ忌憚なきご批判、ご意見をお寄せくださることをお願いいたします。

## 謹賀新年

資料館運営委員長 成田 稔  
運営委員・館員一同



寒ぼたん 撮影 大竹 章

# 資料館一年(97)のあゆみ

復権二年目を迎えた昨年の資料館の動きをふり返って見よう。

▼大阪人權博物館において「病と隔離」―日本の近代とハンセン病―をテーマにパネル展が開催される。(2月4日～3月2日)

▼遠藤周作の「わたしが・棄てた・女」の原作をもとに熊井啓監督が、日活映画復興第一作として制作した「愛する」が完成、試写会が行われる。(2月28日)

▼資料館研修展示室において「好善社・慰廃園回顧展」が開催される。社団法人・好善社は一八七七(明治十)年設立、慰廃園は一八〇五(明治三十八)年、

好善社の事業として目黒に開設された。(3月1日～4月20日)

▼東京・有楽町マリオンにおいて記録映画「見えな壁を越えて」の試写会が行われる。藤楓協会、厚生省、全療協(本部、多磨、栗生、駿河、長島)日本ハンセン病学会、所長連盟、全医労などの関係団体と報道関係外七百数十人が鑑賞した。(3月21日)

▼資料館前のバス停の名称が「多摩研究所前」から「ハンセン病資料館」と改められる。(4月1日)

▼資料館駐車場で恒例の全生園観桜会、各センターのコーラス、民謡、八王子マジックグループのショウ、模擬店も出て盛況であった。(4月9日)

▼全生園真言宗大師堂建立十五周年記念に来園された智積院、成田山新勝寺、川崎大師、高尾山薬王院、高幡不動などの高僧二十三名外による母娘遍路像の供養が行われた。(4月16日)



映画試写会、大谷先生の挨拶

▼松丘保養園、長島愛生園、昔むかし写真展を開催、長島より二十六名がバスで観覧にくる。(5月1日～6月29日)

▼弘前市で開催の七十回日本ハンセン病学会で、学会長の投書問題につき謝罪するとともに、学会長、幹事全員が辞任した。(5月22日)



▼多摩博物館問題研究会の仲間十数名で来訪した八王子の中村修さんが、資料館入館四万人目となり記念品を贈った。(6月6日)

▼ハンセン病資料館四周年記念映画会「見えな壁を越えて」を全生園公会堂で開催。外部より四五〇人が参加。(6月22日)

▼第二十回ハンセン病医学夏期大学が全生園研修棟と国立感染症研究所ハンセン病研究センターを会場に開催。参加者二十四人は資料館に来る。(8月27日)

▼多磨全生園看護学校第三十回楓祭「飛翔展」を研修展示室で開催。ハンセン病研究班の「世界に目を向けて」や「ダイオキシンについて」「いきいき在宅ケア」「高血圧」などの研究発表。(10月15日～11月30日)

・看護婦 23歳 女性

学生の時に全生園で実習をし、この資料館を知りました。館内を見て背スジが寒くなるような感じがしました。偏見で隔離されて一生を過すなんてあまりにひどい事です。現在のAIDSでもそうですが、後々で気づく悲劇はさけたいものです。私達に今出来ることは……身近なものとして考えてゆきたいと思います。

・学生 府中 18歳 女性

私は今演劇活動をしています。私が次の芝居でハンセン病が出て来ます。その為沢山の本を読みましたが、実際に資料館に来てみると、100%ではありませんが、痛み、つらさがどんどん伝わって来ました。

まだまだ多くの問題があるとは思いますが、少しずつ変って来ているんだなあ……と同時に、自分に何が出るんだらうという思いにかりたてられています。一人でも多くの方に、ここに訪れてほしいと思う限りで

・介護員 42歳 女性

世間一般にはまだまだ伝染病という認識が強く残っているのが現状です。療養所勤務という理由で、お茶も飲み寄ってもらえなかったという話も聞きます。素人を説得できるだけの正しい知識を得たくて訪れてみました。駿河療養所盲人会館勤務に役立ててまいります。

・会社員 25歳 男性

私が中学生の頃、療養所のある島に橋を架けるのに監視所を設けることで報道されたことがあり、その時初めてハンセン病というものを知りました。その後、北条民雄の「いのちの初夜」を読んだり、また最近のらい予防法廃止などで関心を持つようになり資料館を訪れました。

ハンセン病に限った話ではありませんが、人間の無知と偏見は恐いものであると

来館者の声  
社会啓蒙に  
資料館の意義

思います。一度うえつけられたものは、それが誤まつていたことにせよ、なかなか拭い去ることはできないものです。広く社会に啓蒙していく為に当資料館はとも意義があるように思います。

・中国の看護婦 八人

今度の見学を通して、いろいろハンセン病についてよく勉強できました。帰国

れたことがあった。その知人とは今は音信不通であるが、元気であればよいと思う。

・神職 笠島 35歳 男性

活字で今まで勉強して参りましたが、実際の資料展示を見て学ぶことができ大変有難い。人の世とは人権とは、と改めて考えなおす好機となります。

・僧侶 滋賀 43歳 男性

僧侶として「業病」と言ったり、または無知から、ハンセン病差別に加担した事実には慚愧いたします。雑居部屋の実態、藤本事件、黒髪小事件は初めて知り、全く憤り以外なにもありません。映画「もののけ姫」で、ライ者が登場しますが、正しい知識を子供たちに伝えたいと思います。

・無職 富山 78歳 男性

ハンセン病の歴史を知り今更乍ら思い当ることがありビックリしている。

・学生 都内 16歳 女性

私の過去の職場に一緒にいた知人が突然この病にかかり、職場から貨物車に乗せられ、長島愛生園に送ら

しく、苦しくなるものがあったけれど、本当にとっても勉強できてよかったです。

・学生 栃木 21歳 男性

ハンセン病の歴史とその時の日本の時代背景がわかると感じた。絵や陶芸の作品などを見て、どれもすばらしい作品でした。(末梢神経の障害があり、手指などが不自由になってしまっていると聞いていたのですが) 今度誰か友人と一緒に来たいとおもいます。

・学生 三鷹 21歳 男性

各展示物にそれぞれ説明があり、わかりやすかった。他の博物館、資料館に比べ照明が明るく見やすかった。小学生以下の子供はたぶん理解できないと思うので親同伴で見たい。でないと館内を走りまわりうるさいだけである。

・保健婦 59歳 女性

資料の四散しがちな今日よく整えてあり、涙と感動の気持ちで見させて頂きました。――略――

# 講演会「偏見・差別を越えて」 『花に逢はん』からの話に感動!

十一月三十日(日)午後一時より資料館において「ハンセン病の差別・偏見を越えて」をテーマに講演会が行われた。始めに成田稔資料館運営委員長が「資料館は何んのために」と題して三十分間講演、つづいて伊波敏男氏



満員の講演会参加者

〔元多磨全生園入園者・(社)ゼンコロ前常務理事〕が、「家族・社会と共に『花に逢はん』から」と題して約二時間講演を行ない、満員の参加者に深い感動を与えた。講演終了後も半数の人は会場に残り、五時近くまで伊波さんとの質疑応答を行ない、理解を深めていた。

## 生命倫理研究フォーラム

東京、大阪、京都の大学若手先生方が主催している生命倫理研究会の第八回フォーラム「ハンセン病を考える」が、十二月七日(日)午後、資料館において開催された。

### 平沢氏に東弁人権賞

成田稔(多磨全生園名誉園長)が医師の立場から、佐川修(資料館運営委員)が当事者の立場からそれぞれ、プロミン以前と以後、予防法、強制収容の実態などを述べて問題を提起。その後、堺、松本、浜松、

受賞は一月八日、霞ヶ関の弁護士会館で行われる。

### ◎あとかぎ

三六五日、八七六〇時間「一年間」を長いと思うか短いと思うか、人さまざまだが、年をとるとともに月日が短く、心のあせりを感じる。

開館五周年を迎える資料館、多くの人に理解と啓発の広がりをもつ。(修)

## 先駆者⑭ 服部けさ

一八八四〜一九二四

服部けさは一八八四(明治十七)年七月十九日に福島県須賀川で生まれた。明治三十八年、東京女子医学校に入り、学生時代に駒込キリスト教会に通い受洗した。大正三年、三井慈善病院で生涯の友、三上千代と出会った。三上千代の後を追って全生病院に転じ直接らい患者の診療に当たった。

一九一七(大正六)年十一月三日、草津バルナバ医院の開設に際し、リー女史(町医、校医、警察医の嘱託となり、その上、近郊への往診には駕籠に乗せられて五キロ、六キロの山道を出向き日夜奔走した。大正六年頃か

聖公会のリー女史と福音教会派の服部、三上とは若干の意見の相違があった。「日本のらい患者は日本人で救わなければならない」と、二人は実際の計画を夜の更けるのを忘れて語りあった。大正十三年、「鈴蘭病院」を滝尻カ原に開院したが、二十三日目の十一月二十二日服部けさは昇天した。

や三上千代に招かれ草津へおもむく。大正七、八年頃から草津町の医師は服部けさ一人であった。そのため夜中でも往診に応じた。

ら病疾心臓弁膜症のため心悸充進したが、毎夜枕許に聴診器をおいて、どんな真夜中でも往診に応じた。